慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	西行の四国下向:大師遺跡巡礼歌群について
Sub Title	
Author	川村, 晃生(Kawamura, Teruo)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication	1983
year	
Jtitle	三田國文 No.1 (1983. 1) ,p.1- 4
JaLC DOI	10.14991/002.19830100-0001
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara _id=AN00296083-19830100-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

四行の四国下向

――大師遺跡巡礼歌群について―

跡巡礼歌群をあらためて取上げ、それを周辺資料と突合わせつつ考は少なからぬ意味を持つものと思われる。そこで小稿では、大師遺してのあり方を考察する際、この四国下向時における大師遺跡巡礼然性は高いと言えそうだが、しかしそれをもふくめて、西行の僧とは、後引する『南海流浪記』の記事内容などを勘案すると、その蓋

Щ

村

晃

生

*

察してみたい。

『山家集』一三五六番に、

同じ国に大師のおはしましける御あたりの山に、庵むすびて住同じ国に大師のおはしましける御あたりの山」は、『西行上人集』などに「大師のおはしましける御あたりの山」は、『西行上人集』などに「大師のおはしましける御あたりの山」は、『西行上人集』などに「大師のおはしましける御あたりの山」は、『西行上人集』などに「大師のおはしましける御あたりの山に、庵むすびて住の庵については『南海流浪記』に、

保田淳氏は、弘法大師の遺跡巡礼歌群(一三五六~一三七一)につ参拝に傾いて論じられる嫌いがあるようにも思われる。たとえば久

い得るであろう。そしてこの下向の目的が、どちらかと言えば御陵

いて、旅日記的な記録的文章という窪田章一郎氏の言を 引 か れ つ

十月之比南大門ニ出テ。南方名山等眺望。南大門前ノ路。弘三丈

めておられる。この久保田氏の、高野山の同行達云々と いう 想定

としては特に取立てて論ずるほどのものではない」と述べるにとど

いったような目的を持った歌稿であったかもしれない。しかし作品

「確かに歌集としては異色で、或いは高野山の同行達に示すと

- 1 -

寺僧云。昔西行此松ノ下ニ七日七夜籠居テ。 五尺。長八町。 左右ニ率都婆多立」之。 其門東脇ニ古大松アリ。

庵その他を拠点として、西行は大師の遺跡を追い、一冬を越したも φ が、右記事中の歌が『山家集』一三五八番に見えている ことから 山する間の紀行で、西行の下向より七、八十年程後れるものである て、仁治四(一二四三)年讃岐に流され、建長元(一二四九) と記されている。同書は高野山僧道範が、寺内の紛争に巻き込まれ とよめるによりて。此松ヲハ西行ガ松ト申也ト申ヲキ、テ(略) ひさに経てわが後の世をとへよ松あとしのぶべき人もなき身ぞ その内容は信頼してよいと思われる。おそらくこの南大門前の 年帰

花まいらせける折しも、折敷にあられの散りけるを

のと推測される。『山家集』一三六〇~一三六六番の雪を詠んだ歌

一三六七番歌、

寺内にあり、『南海流浪記』付載の「誕生院縁起之事」には、 ば、弘法大師が帰朝後建立したものだが、その付近には施坂御堂と ことが知られるのみである。また曼陀羅寺は、『平安遺文』によれ るから、 精舎があったのだが、その礎石もなくなったので、寛元三(一二四 七〇)、我拝師山、筆山(一三七一)等である。大師生誕の地は善通 称する行道所があったらしい。同じく『平安遺文』によれば、両所 五) 年木像御影建立の時に誕生所に一堂を建てた〉旨が記されてい 主要な場所は、大師生誕の地(一三六九)、曼陀羅寺、行道所(一三 などは厳しい越冬の様を物語っているが、その滞在期間中に赴いた しきみをく閼伽の折敷のふちなくば何にあられの玉と散らまし わずかに『山家集』司書によって松がその標に植えられていた 西行の頃にはそれを伝える遺跡は残されていなかったらし 合背は

> とは、 に、曼陀羅寺近くにも庵を構えて大師の行跡を偲んだことになる。 しその伝承を信ずるとすれば、前記の善通寺南大門前の 庵と は別 陀羅寺裏の山の中腹に西行庵と称する小さな堂が残されており、も ものであったことになる。この行道所が非常に嶮岨な地であったこ 建立されている。したがって西行の訪れたそれら両所は、 は大師入滅後かなり荒廃したらしく、康平元(一〇五八) なお我拝師山は、『山家集』詞書に依れば筆山と同一の山となって 『山家集』詞書や『南海流浪記』によって知れるが、 再建後の 年に修造 現在曼

した。それによって、西行の大師への崇敬の念がますます深まって 師の遺跡の一つ一つを、自らの足で歩き目で確かめして一時期を過 いた模様である。 以上見た如く、西行は善通寺を中心としてその周辺に散在する大

思うのである。問題となるのは、 である。 た上で、本歌群中に見られる左の如き本文の異同に注目したいと ところで右のような西行の大師遺跡への並々ならぬ関心を読み取 『山家集』一三五八~九番の部分

0

し、

ったことは想像に難くない。

ひさにへてわが後の世を問へよ松跡しのぶべき人もなき身ぞ いほりのまへに、まつのたてりけるをみて 塔内に納められる大師入唐時の自筆の像であり、後者は四之門の額

のことで、同じく『南海流浪記』によれば「善通之寺」と記されて

どでは別の山となっている。その他、弘法大師の御影や筆跡なども おり、『大日本地名辞書』にも同様な記述があるが、『全讃史』な

一見に及んだらしい。前者は『南海流浪記』によれば善通寺二重宝

ここをまたわれ住み憂くてうかれなば松はひとりにならんとすら

行上人集』(四五七~八)には、両首の間に、右二首は、『山家集』によれば同期の作のように読めるが、『西

という詞書が存する。となれば右二首は別時の作ということになる土佐の方へやまからましと、思ひ立つ事侍りしに、

伝に、

ついて三好英二氏は、が、この異同はどう考えればよいのであろうか。すでにこの詞書にが、この異同はどう考えればよいのであろうか。すでにこの詞書に

佐行脚は実行しなかったであろう。」ないので、果して土佐へ赴いたかどうか判然としない。恐らく土土佐行脚が企てられたらしいが、土佐での歌らしいものは見当ら

上で、と述べておられる。また窪田章一郎氏も、三好氏の意見を引かれたと述べておられる。また窪田章一郎氏も、三好氏の意見を引かれた

て書き加えたのではなかろうか。 佐の方へや」と書いているところを見ると、そのように心が動いたという旅の心境を後年歌稿整理の際に、なつかしい想い出としたの方へや」と書いているところを見ると、そのように心が動い と居を移そうと計画したのは、考え得ることである。ただ「土雪・霰の降る冬の寒さを庬で過していた西行が、四国での南海岸雪・霰の降る冬の寒さを庬で過していた西行が、四国での南海岸

る。 であると解釈した方が妥当であり、詞書は存した方がよいようであれる。たしかに和歌の内容からすれば、土佐に下ろうとした時の歌と述べておられ、両氏ともに西行の土佐行の意志を読み取っておら

る。しかし既述の如く、西行の善通寺周辺の行動をふまえれば、こら南岸へ居を移そうとしたということで、その理由説明をされていてはその目的は何であったのだろうか。窪田氏は厳寒の北四国か

す『続日本後紀』(巻四、承和二八三五年三月廿一日条)に存する卒と、興味深い事実が発見されるのである。たとえば大師の示寂を記はないかと考えられるのである。そこで弘法大師伝を探っ てい くの土佐下向の意志表明も、大師と何らかの点でかかわっているので

、 『1445.1』 190 111. 『1973.1415.3』 (May 1975.1415.3) 114. Wanga May 1975.1415.3 (May 1975.1415.3) 114. Wanga May 1975.3 (May 19

比較的若い頃の記事で、不明な部分の多い空海の若令時の伝の中であったと言える。右の条は、空海が大学を退き仏道修業に励んだ、済著)その他に見えており、空海伝の中ではきわめて著名なもので仰ぐものだが、同類の記事が『三教指帰』序文や『空海僧都伝』(真という記事が見える。右は『大僧都空海伝』(藤原良房著)に材をという記事が見える。右は『大僧都空海伝』(藤原良房著)に材を

を伸ばして四国内にあるもう一つの大師修行の跡を踏んでみたいといる。善通寺周辺において大師修行の跡に接した西行が、さらに足いない。しかもそこは、空海が困難な修業を積んだ所と伝えられていない。しかもそこは、空海が困難な修業を積んだ所と伝えられていない。したがって土佐室戸は、西行にとって空海伝の中で親しれていたをであった。現在土佐室戸には、最御崎寺(東寺)とは核心をなすものであった。現在土佐室戸には、最御崎寺(東寺)と

の跡を追って土佐行を望んだとすれば、この讃岐での大師遺跡巡礼ての生き方の一面を読み取る必要があるかと思われる。西行が大師る方が妥当であろう。しかしそのような心の動きに、西行の僧としべられる如く西行が瞬時そう望んだだけで実行されなかったと考えの土佐行を記す証はない。どちらかと言えば土佐行は、窪田氏が述

思ったのは、自然の成行であったと言える。もちろん家集には西行

『西行上人集』の伝える詞書の一文は、再考に値すると思われるのは、西行に意外に大きな影を落としたと考えられる。そ の 意 味 で

注

である。

頁。 1 外保田淳『新古今歌人の研究』(昭53、吉川弘文館)二二六~二三五 1 外保田淳『新古今歌人の研究』(一九七三、東京大学出版会)七二頁。

- 注1既掲書、七二頁。
- 典文学会〉所収)による。以下同じ。 本文は陽明文庫本『山家集』(久保田淳編『西行全集』〈昭57、日本古
- を認められている。(目崎氏(注1既掲書・二二六頁)も、御陵参拝に下向の目的の重大さ

- 7 九卷一四六四一(延久三年八月十三日)。
- 9 『西行の研究』(昭36、東京堂出版部)二七五頁。8 『西行歌集』(下)(昭23、大日本雄弁会講談社)一三一頁。